

令和7年度

不登校支援に係る 主体的な取組事例



不登校支援に係る取組のポイント

学校が安全・安心な居場所となる「魅力ある学校づくり」を進めること

- 1 個に応じた分かりやすい学習指導の充実を図ること
- 2 児童生徒のSOSを受け止める教職員の力の向上を図ること
- 3 学級担任、教育相談コーディネーター、養護教諭、SC、SSW等が連携し、多角的・多面的な児童生徒理解を可能とする教育相談体制を築くこと
- 4 校内教育支援センター等で、安心して過ごせるようにすること
- 5 オンラインやICTを適切に活用し、教育機会の提供や客観的な児童生徒の状況把握を進めること



岩手県教育委員会

不登校支援に係る主体的な取組事例

- 1 葛巻町立葛巻小学校……………P 2
ホタルーム（校内教育支援センター）の運営
～ひとりひとりが安心して過ごせる居場所づくり～
- 2 遠野市立土淵小学校……………P 3
「安心」と「楽しい」を共に創る学校づくり
- 3 平泉町立平泉小学校……………P 4
組織的な取組で登校しぶりに効果的に対応
- 4 釜石市立栗林小学校……………P 5
児童会での全校活動を中心とした居場所づくり・仲間づくり
- 5 宮古市立新里中学校……………P 6
新規不登校生徒を未然に防ぐ学校づくり
～非認知能力を意識した授業改善と生徒主体の活動を通して～
- 6 九戸村立九戸小学校……………P 7
心理的安全性を重視した不登校支援に関わる主体的な取組

葛巻町立葛巻小学校

ホタルーム（校内教育支援センター）の運営
～ひとりひとりが安心して過ごせる居場所づくり～

概要

本校では、校内の生徒指導委員会や町の関係機関、要保護児童対策地域協議会とのケース会議で、児童への個別支援を検討し、対応している。例えば、不登校傾向にある児童の家庭へ担任外が朝に訪問し、共に登校する等の支援を行い、また、町の健康福祉課の職員もその家庭を訪問し、保護者の話を聞いたり相談に乗ったりしていることが挙げられる。今回は、生徒指導委員会での協議の際、周囲の視線を気にして登校を渋るケースがあったことが課題として明らかになったことから、以下のホタルームの運営に関する取組を行った。

1 ホタルームとは

生活のリズムや学習、人間関係などに不安を抱え、登校に気持ちが向きにくい児童が、落ち着いて過ごすことを目的に設置した部屋のことである。令和6年度までは、校舎内2階の4年生教室の隣にある教室を校内教育支援センターとしていたが、登校時に周囲の視線が気になりやすい児童もいるため、場所を職員玄関から近く、落ち着いて入室できる資料室とし、児童が安心して利用できるよう環境を整え、名前を「ホタルーム」と改めて使用することにした。名前の由来は、校章に表されている「蛍」である。

2 ホタルームの環境について

①環境面での「居場所づくり」

ホタルーム内の棚は、パーテーションや不織布等で覆い、児童にとって視覚的な刺激を減らすようにしている。部屋が出入り口から奥まった位置にあるため、他の児童の目に触れることもなく、安心して過ごすことができるようになっている。座席は長椅子に布を掛け、通常学級の教室とは違う雰囲気になっている。



②心理面での「居場所づくり」

支援の基本体制として、児童の心に寄り添い、児童が安心して自分の思いや考えを表現することができるようにしている。ホタルームの利用時間は、本人と保護者の意向を尊重し、短時間でも利用できるようにしている。

3 ホタルームの活用について

児童が利用する際は、個に応じた学習内容のプリント学習や、当該学年の図工作品の制作等の活動を行っている。その他に、不登校児童の保護者の待機場所や面談の場としても活用している。不登校児童と一緒に来校し、児童が教室に入ることができた場合の保護者の待機場所や面談場所として、これまで保健室を利用していたが、児童の出入りが多いことによる保護者の負担感の減少も考慮し、現在はホタルームを活用している。

成果

- ・不登校状態が続いた児童の登校日数が増えた。
- ・保護者から「他の子どもに見られることなく安心して待つことができる。」との声があった。
- ・保護者が待機している間、養護教諭と面談をし、家庭の状況や学校での児童の様子等の情報共有をする機会が増えた。

課題

- ・広さが不十分なため、狭苦しさを感じる可能性がある。…環境整備が必要
- ・開設して間もないため、事例が少ない。…有用性の検証が必要
- ・不登校傾向にある児童の保護者の理解が不十分。…周知が必要

遠野市立土淵小学校

「安心」と「楽しい」を共に創る学校づくり

概要

本校では、児童が「安心して過ごせる」「楽しいと感じられる」ことを軸としながら、児童と教職員の笑顔がいっぱい溢れる学校を目指している。

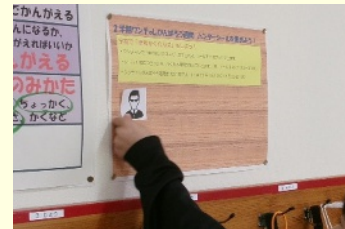
1 学習と連動した行事「ワンチャレがんばろう週間」の企画

ワンチャレの言葉は、ワンチームチャレンジを指し、みんなで取り組もうという意味が込められており、以下の取組を実践している。

- (1) 4月、朝活動の時間に教師が学習者役となり、模擬授業を児童の前で行い、学び合いのモデルの姿を提示している。
- (2) 11月、学年の折り返しを迎えた時期に、児童が自分たちの学び合いの姿を振り返り、さらに力を伸ばす機会を設けている。学び合いで頑張った成果を掲示し、児童自身の目に見えるように工夫した。目標達成後は、児童と教職員が一緒になって全校遊びを行った。



4月 教師による学び合いのモデル提示



11月 シールを貼って取組の成果を共有

2 児童が主体となった取組

- (1) 児童会執行部が全校からふわふわ言葉（言われたら嬉しい言葉）を集めて、児童朝会でランキングを作成し発表した。その後ビンゴカードを配付し、ふわふわ言葉を積極的に使えるような取組へとつなげた。
- (2) 「なかよし学年遊び」を提案し、異学年で遊ぶ時間を設けた。遊ぶ時の組み合わせは、1・6年、2・5年、3・4年とし、上学年が下学年と遊ぶ内容を考えた。話し合う際のポイントは、「みんなでできるもの」、「みんなで楽しめるもの」とし、相手のことを考えながら計画するようにした。

3 教室内掲示の工夫

4年生の学級では、年度当初に児童からロイロノートでふわふわ言葉とちくちく言葉（言われたら嫌な言葉）を集め、教室内に掲示している。



ちくちく言葉には目隠しをする掲示の工夫

成果

- ・教師が児童役となり、学び合いのモデルの姿を実演することで教師と児童だけではなく、全校で学習に臨む姿について共通理解を図り、安心して学ぶ環境づくりを進めることができた。
- ・異学年で楽しく関わる機会を意図的に設けることで、上級生が育つ機会をつくとともに、様々な人とのつながりの良さに児童自身が気付くきっかけとなった。
- ・目に見える場所にふわふわ言葉を掲示することで、温かい言葉を相手に対して使おうとすることに加え、児童自身が温かい言葉を使っていたという肯定的な認知にもつながっている。

課題

- ・児童の様子や学級の実態を捉え、今後も継続して教職員が連携しながら取組を継続していきたい。

平泉町立平泉小学校

組織的な取組で登校しぶりに効果的に対応

概要

1 副校長が核となり対応チーム起動

担任が懸念事項を把握した場合はすぐに生徒指導主事や副校長に相談することを徹底している。またメールシステムによる家庭からの欠席、遅刻連絡を校長が確認し状況を副校長と共有。懸念事項が発生すると、教育相談、特別支援教育の専門的な見地を持つ副校長が核となり、生徒指導主事と連携して生徒指導委員会を開催して対応を協議する即時性を大事にしている。

2 生徒指導委員会

月に1回の開催と必要に応じてすぐに開催することを大切にし、スタンドミーティングの形で行うこともある。対応や情報共有をし、短期目標、長期目標を立てだれがどのようにかかわりを持つかの計画を立てる。対応の効果を常に確認し、情報共有する。職員室内でスタンドミーティングを行い、即時性や状況把握を大切にする。生徒指導委員会に参集する職員は基本的に校長・副校長・教務主任・養護教諭・該当担任・学年主任・特別支援コーディネーターである。

3 効果的連携

担任と生徒指導主事、副校長がこまめに情報共有しながら、児童、家庭とつながりを維持していく。登校できたときは担任だけでなく、担任以外にかかわりが持ちやすい職員ともつなげる。学校心理士の資格のある副校長がかかわりを多く持ちながら情報収集、見立て、関係づくりをすすめ、担任等に対応のための助言を行うこともある。

必要に応じてスクールカウンセラー、教育支援センターを含む教育委員会、町子育て支援課、児童相談所、医療機関と連携を図る。

4 予防的対策

登校しぶりの予防的対策として、児童の居場所づくりと共感的な人間関係の形成を目指した。児童会・委員会活動で主体的な奉仕活動を行い、たてわり班活動による掃除と遊びを実施し、道徳教育を中心に据えた教育活動を展開した。また、活動後のふりかえりで達成感を共有し、メタ認知力を高めた。火・木曜日を早帰り(15:00 下校)時程にし、担任の個別指導の時間を確保した。児童も教員も早く帰ることができることで、心の余裕が生まれるようにした。

校内生徒指導研修会では児童理解・指導法等の研修を行った。昨年度は発達支持的生徒指導の在り方について実践的な声かけ・行動を2回にわたり学んだ。今年度はハイパーQ Uの検査結果を分析し、ワークショップ形式で二学期の学級経営方針の検討を行った。

成果

- ・昨年度と比較して不登校児童が減少(2学期末で0人)。心とからだの健康観察では、しぶり傾向の対象児のうち2名が大きく改善傾向にあり欠席が激減している。全校では33人に大きな改善傾向が見られた。児童の生活の様子からも心の不調状況に改善が見られている。
- ・指導者が自信を持って児童や家庭への指導にあたることができている。このことが児童に心理的な安心感をあたえ、登校しぶりの減少につながっている。
- ・対象児童だけでなく、全校児童の心の安定も図られ、校内に落ち着いた雰囲気と活力が感じられている。
- ・連携により職員間の一体感と安心感が高まり、教育効果の向上につながっている。

課題

- ・情報の共有・連携は常に意識的に行う必要があり、普段から声を出しやすい職員室にしておくことが大切である。
- ・心の不調を抱える児童は必ずいる。見逃さず根気強く継続的に対応すること、短期的目標、長期的目標を掲げ常に修正しながら「良い方向に行く」希望を共有して指導にあたりたい。

釜石市立栗林小学校

児童会での全校活動を中心とした居場所づくり・仲間づくり

概要

本校では、小規模校の特性を活かして、児童会（栗っ子幹部）が中心となった全校活動を多く取り入れている。活動をとおして、児童は互いに助け合い、交流を深めることができ、結果として、児童一人ひとりの居場所づくりや仲間づくりにつながっている。

1 栗っ子わくわく発表会

自分の得意なことを全校の前で表現することで、自身の得意なことや良さを自覚し、自己肯定感や学校全体の「わくわく感」を高めることをねらいとして、令和6年度から毎学期1回程度行っている。現在も児童（栗っ子幹部や各学級委員など）が中心となって会を企画・運営している。

発表者は事前に立候補し、準備や練習を行う。内容は自由で、国語の学習を活かした音読や、習い事のピアノ、バスケットボールの実演などが行われている。さらには、一輪車の演技やカラオケ、マジックショーなど児童の興味関心に沿った発表内容は様々である。毎回の発表会はとても盛り上がり、最後には、友だちの頑張りをたたえる拍手や温かい感想であふれている。

2 栗っ子ワクワ給食

委員会の行事として、全校給食交流会を毎学期1回開催している。全校が一つの教室に集合し、学年の枠を越えた好ましい人間関係を構築する目的で交流を深めている。また、教職員も児童と一緒に給食を食べながら児童理解に努めている。



成果

- ・児童は、自己有用感を得ながら役割を果たしている様子が見られる。周囲から認められることで、自分の成長を自覚できる機会となっている。
- ・活動をとおして、友だちの長所を認めることが温かい人間関係を構築することにつながっている。
- ・小規模校の良さを活かし、企画・運営を行う児童と参加する児童が一体となり、全校でよい雰囲気をつくろうとする意識が生まれている。
- ・学級とは異なる集団での活動が、異学年の児童を理解し、思いやることにつながっている。



課題

- ・わくわく発表会については、全校25名という良さを活かし、全員の発表をすることも可能ではないかと考える。その一方で、開催面での制約（開催回数や時間の確保など）が課題である。

宮古市立新里中学校

新規不登校生徒を未然に防ぐ学校づくり ～非認知能力を意識した授業改善と生徒主体の活動を通して～

概要

非認知能力については、初等教育において取り上げられることが多いが、中学校でも同様に重要であると考え、今年度教育活動全般において非認知能力に着目して取り組むこととした。また、これが新たな不登校を出さない取り組みにも通じると考える。具体的には以下の通りである。

1 発達支持的生徒指導を重点として「できる、わかる」が実感できる授業改善等

(1) 生徒指導の4機能を意識した授業改善と教師間交流に基づいた声掛け

「できない、わからない」が不登校の大きな要因の一つであると考え、「できる、わかる」と実感できるように生徒指導の4機能を生かした授業づくりを心掛ける。また、『生徒指導提要』でも、授業や行事等を通じた個と集団へ働き掛けが例示されている。そこで、日常の中で、個に寄り添う効果的な学習支援方法等についてだけでなく、生徒への具体的・効果的な「励まし」や「賞賛」、「対話」になるように、生徒の様子についても教員間での交流を心掛けている。

(2) 行事や部活動等に向けた指導の充実

「できた、わかった」など学習面だけでなく、日々の生活の中で自分自身の成長を実感させるために、行事や特定の期間において、事後の自身の「目指す像」と、それに近づくためにどんなことを意識して取り組むかの「手立て」を生徒自身に考えさせ、事後に振り返りを行うようにした。教師についても同様に「手立て」の意識や共通認識を高めるために実施した。

2 全校生徒が互いの良さを認め合い、支え合える集団作り

(1) 生徒主体の生徒会活動の推進

学期末や文化祭では、生徒会執行部が企画した交流活動を実施している。「いじめ」や「不登校」を無くすためには、「交流場面を増やし、互いの良さを知ること」という歴代生徒会執行部の理念を基に、内容を工夫しながら毎年実施している。活動時のグループはねらいを持った構成になるように生徒会執行部を中心に考えている。この活動が「居場所づくり」に大いに効果を発揮している。

(2) 縦のつながりを意識した日常の活動

小規模校ゆえの小さく限定されたコミュニティーにならないように、部活動や委員会活動以外に毎日の清掃も縦の集団で実施している。さらに、日常の中でそれぞれの生徒が全生徒と関わられるよう工夫している。縦横様々な方向につながりがあり、個人に1つ以上の役割があることで、「責任」や「つながり」を強めることに役立っている。

成果

- ・生徒主体の生徒会活動の推進により、体育祭などの行事後の生徒会アンケートでは、達成感や充実感、仲間との協力について肯定的な言葉が多くみられる。また、学校評価の「学校が楽しい」においても積極肯定が高い結果になるなど、居場所づくりの一翼を担っている。
- ・学校評価の「夢や目標がある」については、生徒・保護者共に肯定評価に高まりがみられた。今年度、生徒・教師共に「目指す像」や「手立て」の明確化・共有化によって意欲や意思等の変化がみられ、それが保護者にも伝わっていると思われる。

課題

- ・「夢や目標がある」の上昇に伴い、勉強に対する危機感が見られるようになってきた。こうした気持ちを自己の成長につなげるためにも、「できた・わかった」と実感できる授業改善が必要である。
- ・「自己調整能力」育成のためにも、生活記録ノートを活用しながら、落ち着いて「今週の振り返り」や「次週の見通しを立てる」時間を週末の帰りの会等で確保できるようにしたい。

九戸村立九戸小学校

心理的安全性を重視した不登校支援に関わる主体的な取組

概要

令和7年度に開校した九戸小学校は、九戸村の5つの小学校が統合した学校である。不登校傾向の児童だけではなく、全ての児童にとって、心理的安全性の高い自分の居場所となる九戸小学校を目指している。具体的な手立ては以下の3つである。

1 心理的安全性が高い学校環境を、児童と教職員が共に創る

統合前の3学期から、統合する全5校の児童と教職員で、『3つの友だちを大切にする方法』を共有し、九戸小学校スタートから実施している。

- ① 名前は呼び捨てせず、〇〇さん・〇〇ちゃん・〇〇くんで呼び合う。
- ② 友だちの心を傷つける言葉は使わない。
- ③ クラス全員に、聞こえる声の大きさと話す。

2 多面的・多角的な組織で取り組む、不登校の未然防止

不登校が心配されていた児童は、担任だけに任せず必ず管理職も関わり、生徒指導と特別支援Coを中心に、ケースに合わせてスクールカウンセラー、九戸村の保健福祉課、教育委員会、社会福祉事業所、特別支援学校等とチームを組んで対応している。保護者と共に決めた具体的な指導を実施することで、短期的・長期的な目標の姿も共有でき、保護者・全教職員・教育委員会等の関係者が共に児童の成長を共感しながら、保護者との関係性も高めることができています。

3 全教職員で183人の児童を主役にする、心理的安全性を保障する指導

4月から、183人が校章に描かれているスター（主役）の学校を実現するため、担任だけではなく、全教職員で全児童を指導していくことを共有している。担任は、学級児童の学期ごとの具体的なゴールの姿を見据えながら、児童の活躍できる場の設定と活動を保障する。付けた力を保護者が共感できる場の設定も、行事等を通して全職員共有で行っている。

名前は、みんなが
生まれてはじめて、
お家の方から
もらった
大切なプレゼントです。

九戸小は
183人の新しい友達を
大切にしている学校です。
この理由で・・・
よび捨て禁止です！

【5校共有スライド】

成果

- ・「友だちを大切にする方法」が明確で、誰もができているかどうかを判断できるため、お互いに安心できる環境を保とうとする声掛けが当たり前になっている。現在は、児童・教職員そして保護者とも「安心・安全」をキーワードにし、心理的安全性の高い学校を協働的に創っている。
- ・学校で居心地の良さを実感した児童から提案される企画は、いつも児童主体の「安心・安全」な学校を創り続けるものになっている。
- ・全児童183人が全ての行事に参加でき、保護者には、目に見える形で児童の成長を実感してもらう機会となった。
- ・教職員と児童が共に「全児童が主役」という意識をもっているため、合理的配慮のある認め合う学級経営が実現している。

【～児童からの発案～
階段に優しい言葉】

課題

- ・183人を全教職員で育てていくため、教職員間の情報共有が常にできる場の設定や、指導や活動での共通理解が当たり前の職場風土を創り続ける工夫が必要である。
- ・児童のケースによって適切なサポートや相談が可能な、繋がることのできる教育関係機関・医療機関との連携を広げていく。